

## 2020年夏、新しくなったヘルダーリン塔へ (H. Hayashi) [J]

日本でGoToトラベルキャンペーンが物議を醸していた2020年夏、普段は国外にでかけることの多いドイツ人も、このときばかりは国内で休暇を過ごす人が増えた。ミュンスター大学に留学中の私もこの夏は国外に出ることはあきらめ、テュービンゲンまで足を延ばすことにした。詩人ヘルダーリン(1770-1843)の生誕250年に合わせて今年2月にリニューアルオープンした通称「ヘルダーリン塔」を訪れるためだ。



ネッカー川の河岸に建つヘルダーリン塔(写真手前の半円柱型の建物)は、彼が後半生の40年近くを過ごした場所だ。もともとは木材加工の職人だったErnst Zimmerの住居で、ヘルダーリンが治癒不可能な精神疾患だと診断された後、大学病院の出入り業者で『ヒューペリオン』のファンでもあったZimmerが彼の面倒を見ることになった。ヘルダーリンの死後、火災での消失と再建を経て、現在は彼の足跡を紹介する博物館となっている。ヘルダーリンについて研究している私にとって、ここは一度訪れておきたい場所だった。

テュービンゲン自体には2017年と2018年に来たことがある。ただそのときにはヘルダーリン塔はすでに改装工事中で、入館することはかなわなかった。ベルリンの空港建設の例のように、ドイツでは工事の進捗がとにかく遅い。そのため生誕250年のように絶対に間に合わせなければならない期限がある場合は、それを見越してとんでもなく早く工事がスタートする。過去二回は空振りに終わってしまったが、今回ようやく三度目の正直となったのである。

しかし本音を言うと、コロナ禍の中でテュービンゲンまで本当に行くべきなのかどうか迷う部分もあった。利用する格安深夜バスでコロナ対策がどこまでとられているのかも不安要素だった。

何せドイツでは、すでに以前と変わらず多くの人がマスクを着けずに至近距離で行き交っている。もちろん店内や交通機関ではマスクの着用が義務付けられているものの、端から見ればコロナ禍はすでに過ぎ去ったかのようだ。深夜バスもマスク着用義務があるだけで、座席はいつも通りの4列シートだった上、手指の消毒液も用意されてはいなかった。確かに旅にはいつもリスクがつきもので、すべてを受け入れて自分のことは自分で守る心構えが大切なのだろう。

私が午前11時の開館直後にヘルダーリン塔の前に着いたときには、入り口前にすでに入場待ちの列ができていた。さすがは「テュービンゲンのランドマーク」だと観光案内板に書かれているだけのことはある。入館には氏名と連絡先の記入、手指の消毒が義務付けられている。入場料は無料だ。ヘルダーリン「塔」とは言うものの建物自体はそれほど大きくなく、博物館として展示スペースになっているのは1階と2階のみのため、一度に入れる人数がかなり制限されていた。

ヘルダーリン塔の内部の写真は以下のウェブサイトで見ることができる (<https://www.tuebingen-info.de/de/attraktion/hoelderlinturm-museum-11c5c12afe>)。残念ながら以前の展示内容を知らないのですが、前から引き継がれたものがあるのか、完全に一新されたのかどうかは私にはわからない。ただし、床に張られた木がフレッシュな香りを漂わせるほど内装は真新しいことだけは保証できる。現在の展示は主にヘルダーリンのテュービンゲン時代についてだ。つまり神学校でヘーゲルとシェリングと学んだ時代(1788-1793)と、大学病院に入院してからヘルダーリン塔で亡くなるまでの時代(1806-1843)だ。一番初めの部屋にはヘルダーリンが塔の中で書いた詩の一つが大きく掲示されていた。

人生の線はさまざまである／道が、山の稜線がそうであるように。／私たちのこちらでの姿をあちらでは神が満たしてくれる／ハーモニーと永遠なる報酬と平和とで。

この詩が展示全体のシンボルに据えられたのは、苦難に満ちた人生の肯定と、それが終わったあとの安寧への期待をヘルダーリン本人と重ねることができるからだろう。しかしそれだけでなく、訪れた人々が自分の人生と重ね合わせることもできる。「神」は原文では *ein Gott* であり、*der Gott* ではない。この不定冠詞は「神」と呼ばれるものが特定のものではなく、何にでもなりうる可能性を示唆している。各人には各人の神があり、各人には各人の人生があるのだ。

展示内容については実際に見に来て確認してもらうのが一番だが、ここでは私の印象に残った展示を二つだけ紹介させていただきたい。一つ目は、詩のテキストを見ながら朗読の音声を聞くことができる装置だ。これだけではスタンダードな展示だが、そこにもう一つ工夫が加えられて

いた。テキストが表示される画面の横に何やら木の板が置かれている。手のマークが書かれていて、どうやら手を置いてみるということらしい。手を置くと強勢に合わせて木が振動しているのがわかった。詩を視覚や聴覚だけでなく、触覚でも感じ取れるようにする展示法は新鮮だった。

次に紹介したいのは、複数のアーティストがヘルダーリンの詩をテーマに制作したビデオを視聴できるコーナーだ。その中で最も強く印象に残ったのは Christian Reiner という俳優による『あたかも祝いの日に…』の朗読だった。彼の魅惑的な低音イケボ（美声）は、録音の様子を撮影したモノクロの映像と非常によくマッチして、この詩の持つ静けさ、力強さ、荘厳さを露わにする。この詩は途中からところどころ空欄が現れ未完に終わるのだが、その箇所を朗読するときには生じる「間」は、詩の完成を阻んだ詩人のためらいをより一層緊迫した表現で描き出していた。Reiner の朗読は（別の詩ではあるが）彼の YouTube チャンネルで視聴することができる ([https://www.youtube.com/watch?v=nv0RQM7rwOk&ab\\_channel=ChristianReiner](https://www.youtube.com/watch?v=nv0RQM7rwOk&ab_channel=ChristianReiner))。

展示を見終わり外に出ると、きれいに整備された庭があった。ヘルダーリン塔内ではマスクを着用しなければならなかったのが、緑の中で一層の開放感を感じた。ヘルダーリンもこの庭に下りてきて、一息ついていたのだろうか。彼は40年近くこの塔の中でいわば自粛生活を送っていたが、今年は世界中の人々が同様の引きこもり生活を体験することになった。コロナ禍がなければ生誕250年の記念イベントも問題なく開催されていたし、テュービンゲンにももっと大勢の観光客が訪れていただろう。ヘルダーリンを研究してきた身としては非常に残念な部分もある。ただ来年以降もヘルダーリン塔はずっとそこにあり続ける。テュービンゲンに来た際はぜひ訪れてみてほしい。

林 英哉（京都大学／ミュンスター大学）